

渡部泰明 編

源実朝

虚実を越えて

監修

目次

序言……………渡部泰明 4

鎌倉殿源実朝……………菊池紳一 7

建保年間の源実朝と鎌倉幕府……………坂井孝一 18

文書にみる実朝……………高橋典幸 36

実朝の追善……………山家浩樹 43

実朝像の由来……………渡部泰明 60

実朝の自然詠数首について……………久保田淳 73

実朝の題詠歌——結題(〓四字題)歌を中心に……………前田雅之 81



SAMPLE

実朝を読み直す——藤原定家所伝本『金槐和歌集』抄……………中川博夫 98

柳営重槐本をめぐる問題——編者・部類・成立年代……………小川剛生 112

中世伝承世界の〈実朝〉——『吾妻鏡』唐船出帆記事試論……………源健一郎 126

『沙石集』の実朝伝説——鎌倉時代における源実朝像……………小林直樹 145

源実朝の仏牙舍利将来伝説の基礎的考察——「円覚寺正統院仏牙舍利記」諸本の分析を中心に……………中村翼 155

影の薄い将軍——伝統演劇における実朝……………日置貴之 167

近代歌人による源実朝の発見と活用——文化資源という視点から……………松澤俊二 180

小林秀雄『実朝』論……………多田蔵人 194

序言

渡部泰明

私たちは、なぜ源実朝に惹かれ続けるのだろうか。

建久三年（一一九二）八月九日、源頼朝を父、北条政子を母として誕生。建久十年には父頼朝が急逝し、建仁三年（一二〇三）九月七日、十二歳にして鎌倉幕府第三代征夷大将軍となった。建保六年（一二二八）正二位右大臣にまで上り詰めたが、翌建保七年正月二十七日、右大臣拝賀の式のために参詣した鶴岡八幡宮社頭にて、甥の公曉に殺害された。享年二十八歳であった。そうして令和元年、西暦二〇一九年という年に、没後八〇〇年を迎えた。

八〇〇年が経っても、源実朝への関心はけっしてなくなっていない。むしろ近年になって、ますます高まっていると思われる。征夷大将軍を務めた実朝の存在は、鎌倉幕府はもちろんのこと、朝幕関係を含めた当時の時代史と不可分である。とすれば、それらの研究の進展によって、将軍としての活動やその意義についても、新たな照明が当てられておかしくない。実際に新しい実朝の将軍像が示されはじめている。無力な傀儡という先入観には、強く反省が迫られているといつてよいだろう。

政治家としての実朝だけでなく、文学者実朝に対しても、改めて問い直しがはかられている。実朝の歌はたしかに魅力的だけれども、それだけに読み手それぞれの世界に引き寄せられがちであった。近年、実朝の表現意識に即し、鎌倉時代初期の時代の表現として、改めて腰を据えて読もうとする機運が高まっていることが感じられる。歌人への評価は、その作品を一首一首読むことによつてはじめてなされる、という当然の前提が、しばしば置き去りにされてきたことへの反省からである。たしかに実朝の和歌には、置き去りにさせるだけの希有の個性があるが、それを凡作・習作と呼ばれる作品とともに、総合的に判断しようというのである。

こうした動きは、いうまでもなく従来の実朝像の変更を迫ることになる。新たな実朝像とはどのようなものであろうか、興味津々たるものがある。とともに、これまで実朝はどういう像を結んでいたのか、と改めて問われてくるのである。

源実朝をどう捉え、どう意義づけるか。これはすでに鎌倉時代から大きな課題としてあつたようだ。『吾妻鏡』の記述や、彼の追善の継承などにそれは表れている。『吾妻鏡』の語る実朝はすでに伝承的な様相を呈しているといえようが、説話集『沙石集』など中世伝承文学の世界にも独自の实朝像が見られる。仏舍利将来伝説にも見られるという。近世から近代へと、演劇の世界にも取材され、舞台上上げられもした。

歌人としての実朝も、中世から注目されていた。『新勅撰集』以下の、十三代集と呼ばれる勅撰集にすべて入集しているほか、室町時代には、『柳営亜槐』なる人物の手によつて、七一九首を収める家集が編纂され、これを祖本として貞享四年（一六八七）に板本『金槐和歌集』が刊行された。近世では、賀茂真淵の実朝研究も忘れがたい。

しかし何といつても近代になってからの、アララギ派をはじめとした、歌人実朝への絶大な評価を抜きにして、現代の実朝像を語ることはできない。正岡子規・斎藤茂吉・小林秀雄・太宰治・吉本隆明などといった、さまざまな分野の文学者達が、実朝に表現欲を駆り立てられてきた。彼らは彼らの文脈で、自らの想念を実朝に託した。実朝を通して自己を表現しようとした、彼らの文脈とは何だったのかは、冷静に読み解かれる必要がある。彼ら文学者の実朝観が、文学研究にも大きな影響を与えたからである。そして託せるだけのものが

あつた実朝の、いわばポテンシャルを計測することへと、翻つて関心が向かうことにもなるのである。昭和四年に発見紹介された、『金槐和歌集』の圧倒的な古写本である、いわゆる「定家所伝本」の『金槐和歌集』の精密な読解はこれからも続けられなければならない。

我々は実朝の虚像の持つ意味を冷静に見つめつつも、同時に実像への追究を諦めてはならない。歴史と文学史に深く関わつた実朝を問うことは、歴史や文学史を改めて問い返すことになるからだ。虚像と実像を往還する、粘り強い視線の先に、新たな実朝像も立ち現れるだろう。本特集の表題に、「虚実を越えて」の副題を付した所以である。

SAMPLE